法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-22

アメリカ文学にみるユダヤ人像(その1)

河野, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
92
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
1995-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004753

Hosei University Repository

アメリカ文学にみるユダヤ人像（その1）

河　野　　徹

1．序　章

中・近世，近代，および現代イギリス文学におけるユダヤ人像を過去3年間にわたって考察した後を承け，やはり三部作形式で年代順にアメリカ文学におけるユダヤ人像の探究を試みたい。拙論「現代英文学にみるユダヤ人像」(1994）のなかで，ジェイムズ・ジョイスとともにT.S. エリオットとエズラ・パウンドを取り上げたので，すでに現代アメリカ文学の領域に僅かながら足を踏み入れたことになろうか。

近代イギリス文学までについては，モダー，ローゼンバーグ，フィッシュらの著作に負うところが多かった。(1) アメリカ文学で同じテーマを研究する際に頼るべきガイドとしては，ハラップ，リプツィン，フィードラーの3者をまずあげるべきだろう。(2) とくにハラップの浩瀚な『アメリカ文学におけるユダヤ人像』(1974）を介して，イギリス文学と同様アメリカ文学でも，主要な非ユダヤ系作家・詩人の多くが「ユダヤ人」をメタフォリックに活用してきた実態をつぶさに窺うことができる。関連作品の関連箇所について，ハラップらの「ユダヤ人像」分析を手がかりとしながら，非ユダヤ人作者にとって不可避だった時代環境の影響も度外視することなく，なるべく通文化的視野に立った解釈を加えるようにしたい。

植民地時代から南北戦争，両次大戦を経て現代に至るまで，非ユダヤ系アメリカ人の作家・詩人たちが紡ぎ出してきたユダヤ人像を，（イ）社会的・歴史的影響の所産として，（ロ）イギリス文学から伝わった神話的アーキタイプの亜流として，また（ハ）作家・詩人銘々の精神内部の投影として分類・考察することが，基本的な手順となろう。19世紀中葉までに描かれたユダヤ人像は，概ね（ロ）のアーキタイプに支配されていたが，アメリカ移民社会は徐々に「隣人としてのユダヤ人」像を生成させ，以来両者が交錯し合って，「ユダヤ

Hosei University Repository

人」の表現表象に独特の愛憎併存的心理（アンビヴァレンス）を発現させる。その両面性を歴史の流れに即して把握するとともに，個々の作品のなかで多彩に表象されたアンビヴァレンスを解読し，当該作者の精神的基底部の規模をも測れたら，と希っている。

上記「英文学にみるユダヤ人像」三部作を通じて得た知見の一つは，ある非ユダヤ系作家の作品のなかで，反ユダヤ的（もしくは親ユダヤ的）メタファーがどのような役割を果しているかに着目すれば，その作家の人間観・社会観を含め想像的世界の全貌をより明確に把握できるということである。視点を主役的なキリスト教徒から脇役的なユダヤ人に移すだけで，作品の様相と意味合いが一変する。たとえば，中世ロマンスに過ぎないと思われていた『アイヴァンホウ』も，ユダヤ人の親子アイザックとレベッカを仮の主役と見立てるだけで，歴代王朝の財政破綻や騎士道の非人間性に対する作者スコットの痛烈な批判が炙り出しの画のように浮かび上がってくる。(3)

アイザックとレベッカだけでなく，『マルタのユダヤ人』のバラバスとアビゲイル，『ヴェニスの商人』のシャイロックとジェシカ，『オリヴァー・トウィスト』のフェイギン，『トリルビー』のスヴェンガーリ，『ダニエル・デロンダ』の同名の主人公等々，イギリス文学には，一読しただけで記憶に深く刻み込まれるユダヤ人像が少なくない。これらのユダヤ人像を介して，各時代の社会的・思想的特徴だけでなく，作者自身の人間観や想像力をも逆探知し得ることが分かった。しかし傑作が目白押しの19世紀アメリカ文学を見渡しても，そのような象徴的に極めて意義深いユダヤ系登場人物は，誰一人見当たらないのである。

ポーとホイットマンは「ユダヤ人」にまったく触れていないし，(4) ホーソーンの『緋文字』やメルヴィルの『白鯨』にもユダヤ人はまったく登場しない。『白鯨』の92章，「竜涎香」（Ambergris）と題された短い章で，総称的に「ユダヤ人」を持ち出しているのが唯一の例外である――「本当の話，鯨という種族は，生きているときでも死んでからでも，まともに扱ってやりさえすればけっして悪臭を放つような生きものではない。従ってまた，中世の人々が一座のなかのユダヤ人を見つけ出すと称して面白半分にやったように，鼻を使って鯨捕りを嗅ぎ分けようとしたところで，それは無理というものだ。」(5)

ユダヤ人関係の言及がこのように僅少で，それも伝承の類に限られているのは，まず植民地時代から19世紀後半にかけてアメリカのユダヤ系人口が希薄

Hosei University Repository

だったからに他ならない。さらにヨーロッパでユダヤ人が受けていた迫害をアメリカで受けているのは，明らかにインディアンと黒人であり，南北戦争以前には，黒人奴隷を交易したり使役したりするユダヤ人も珍しくはなかった。信仰，言語，慣習を異にしてはいたが，ヨーロッパから渡来した他の民族集団と並んで，ユダヤ人も白人の移民であることに変わりはなかった。アメリカ社会で「行動」(behavior) としての反ユダヤ主義が顕現するのは，南北戦争の激化に伴って経済的，精神的に疲弊していた国民各層がスケープゴートを「ユダヤ人」に見出して以来のことである。とはいえ，パターン化した「態度」(attitude) としての反ユダヤ主義がそれまで存在しなかったわけではなく，ただ見落とされていただけなのである。第一級と目されるユダヤ系の歴史家でさえ，19 世紀末葉までアメリカに反ユダヤ主義は存在しなかったと主張するような，現実糊塗的（あるいは摩擦回避的）雰囲気が支配的だったことも加わって，[6] アメリカ文学史を通じてユダヤ人がどう描かれてきたかを本格的に取り上げるきっかけはなかなか生じなかった。

ライオネル・トリリングは 1930 年，弱冠 24 歳のときに，イギリス文学におけるユダヤ人像を扱った「ユダヤ人神話の変遷」(“The Changing Myth of the Jew”) というエッセイを『メノーラ・ジャーナル』に寄稿し，組版も済んでいたのに，どういうわけか掲載されなかった。あとでトリリングは，「不出来でつまらぬ」(‘inferior and dullish’) エッセイだったと回顧しているが，掲載を控えたのが編集者だったのか，執筆者自身だったのか，それとも双方合意の上であったのかは不明である。そのコピーがシンシナティのユダヤ系アメリカ人関係古文書館で発見され，『コメンタリー』誌上に初めて発表されるのは，彼の没後 3 年を経た 1978 年のことである。[7]

マルクス主義思想やモダニズム芸術の影響下にあった今世紀前半のユダヤ系知識人は，宗教的・民族的な枷を抛ち，普遍的文化への参入を志していたから，「ユダヤ人像」にこだわったりすれば，ノイローゼかあるいは文学的鈍感を疑われかねなかった。第 1 次大戦前後までのユダヤ系アメリカ文学はまだ，主流社会に向かってもっぱら自民族の価値と利害を表明しようとする観念的で偏狭な「亜文学」(subliterature) とみなされていた。[8] 要するに，「ユダヤ人像」の研究など卑小と感じられるような知的雰囲気が遍在していたのである。その高揚した知的抱負とは裏腹に，現実の日常生活でユダヤ系アメリカ人の第 2 世代が，第 1 世代のイディッシュ訛りや非アメリカ的風習を深く恥じ，

Hosei University Repository

自らの言動や仕事ぶりに対するワスプ主流の反応にきわめて敏感で，自らに不利な反応を刺激するような論述は控えがちであったことも考慮に入れるべきだろう。実際には主流社会の「ユダヤ人像」がたえず気になっていた，しかしそれを糊塗するか，もしくはあれどもなきがごとくに扱うという風潮だったのだ。半世紀もの間古文書館に埋もれていたトリリング若かりし日のエッセイが辿った運命に，「ユダヤ人像」研究の消長を見出せよう。

ユダヤ人社会のなかで，移民第二世代の同化志向に反発した第三世代が，エスニック・ブームの時流に乗ってユダヤ性探究を目指した 1970 年代以降，やっとアメリカ主流社会との関係を歴史的に見直す機運が生じ，その一環としてハラップの研究が「ユダヤ出版協会」(The Jewish Publication Society) から公刊されたと考えてよかろう。非ユダヤ系アメリカ作家のユダヤ人観は，現在もなお「神話的ユダヤ人」と「隣人としてのユダヤ人」の間を揺れ動いており，その揺れ動き，即ちアメリカ人がユダヤ人に対してずっと抱き続けてきた相互矛盾的，愛憎併存的態度を歴史的に辿ることが，「ユダヤ人像」研究の主眼となる。

「神話的ユダヤ人」像に端を発する固定観念は，宗教的なそれと経済的なそれに大別でき，そのいずれも，同時代人，同国人としてのユダヤ人を同類項扱いつまり十把一からげにする。イスカリオテのユダとシャイロックがその原型 (archetype) となろう。「隣人としてのユダヤ人」像は人間直視型，個性賦与型，つまりリアリズムということになるけれども，リアリズム作家が必ずしもユダヤ人を「隣人」として直視し，個性化し得ているかといえばさにあらず，神話的固定観念をまま露呈してしまうから，問題は複雑なのである。関連する作者が両者のいずれに傾いたか；同一作者についても，その傾きに変動があったかどうか；また作品中でユダヤ人が表現表象されるとき，そこに当該時代のユダヤ人観が反映しているかどうか；その反映があくまでも技法上の必要によるものか，それとも作家の思念そのものであるのか。このような問題と取り組むには，ユダヤ系アメリカ人の歴史をアメリカ史そしてアメリカ文学史と相互対照的に捉え直すことが必要となる。その予備段階として，まずアメリカにおけるユダヤ人の歴史を植民地時代から南北戦争前後まで概観してみたい。

Hosei University Repository

2．ユダヤ系アメリカ人の歴史 ―植民地時代から南北戦争まで―

2・1 植民地時代

旧約時代のユダヤ人には，幾度も滅亡に瀕しながら奇蹟的に救い出された神の選民という輝かしいイメージがある。ニュー・イングランドの清教徒たちは自らを，ファラオの圧政から逃れ，神の導きで紅海を渡った古代イスラエル人になぞらえた。植民地形成の基本的契約となっただけでなく，のちにアメリカ独立と合衆国憲法の思想的背景をもなしたとされる「メイフラワー誓約」(The Mayflower Compact, 1620) の文言には，比類なき信仰を貫くための国づくりに尽瘁した預言者的立法家モーゼの息が通っているかのようだ。(9) セイレムという村落の命名には，「新しいエルサレム」を築き上げようという彼らの念願がこもっている。子供の命名でさえ，ナサニエル，エズラ，エゼキエル，アビゲイル，レイチェルなど聖書でおなじみの人物に因んでいた。このように古代イスラエル人とヘブライ語聖書を崇敬しながらも，マサチューセッツの清教徒らが，同時代のユダヤ人つまり異教徒を迎え入れることは論外だったにちがいない。清教徒らがアメリカへ渡航したのは，英国国教会の制度や儀式に囚われず，より純粋な信仰生活に専念するためで，他宗教，他宗派に対する寛容は無いものねだりになろう。同じ清教徒でも，マサチューセッツ植民地の神政体制に批判的な「異端者」は弾圧迫害され，コネティカット，ロードアイランドなどに新植民地を開く他なかった。いわんやイエス・キリストの救いの啓示に抗い，あまつさえその救いの主を死に至らしめた「パリサイびと」とその後裔は，神の選民たる資格を喪失したも同然であった。

ユダヤ人でマサチューセッツ湾岸のコロニーに迎えられるとしたら，ユダヤ教と訣別しキリスト教に改宗したヘブライ語教師位のものだろう。ジューダ・モニスは 1720 年頃ボストンに現れ，旧約聖書とカバラ神秘思想を援用しつつ「三位一体」の正しさを論証したことで有力者の信用を得た。1722 年に公式の洗礼を経ると直ちにハーヴァード大学のヘブライ語講師に任用され，その翌年には同大学から修士号を授けられた。1735 年に彼の手で合衆国最初の『ヘブライ語文法』が刊行され，1760 年に退職するまで講師の座は保たれた。(10) しかしモニスに次いで二人目のユダヤ系学生がハーヴァードから学位を授与されるのは，1800 年以後のことである。(11)

Hosei University Repository

清教徒たちの間では，「ヨハネ黙示録」で予言された千年王国の到来，即ちキリスト再臨を待望する言説が盛んであった。それによれば，死者が蘇り，最後の審判が下って，新しい千年王国の朝明けを迎える前に，すなわちキリストの再臨に先立って，ユダヤ人がキリスト教に改宗しなければならなかった。メルヴィルの長詩『クラレル』の同名の主人公がエルサレムで最初に出会うニーマイア（Nehemiah）も，熱烈な千年王国信者で，故郷ロードアイランドのナラガンセット湾を去り，40年間聖地でユダヤ人改宗の必要を訴えながら放浪を続ける。非常に親ユダヤ的なキリスト教徒ならば，神の選民たるユダヤ人は世界への天の恵みであり，われわれの文明の源泉となった方々の後裔であり，神の子としてわれわれが崇敬する方と同じ血統につながる栄光の民族であると主張するかもしれない。しかしその親ユダヤ的なキリスト教徒でも，やはりユダヤ人が改宗に踏み切り，自分と同じくキリストに救いを求めてほしいと願う気持ちは強いのだ。

*　　*　　*

マサチューセッツを追われた清教徒指導者の一人ロジャー・ウィリアムズは，「歴史の冗談で17世紀に産み落とされた20世紀人」と称されるだけあって，[12] 彼が1636年に開いたロードアイランド植民地は，「万人のための宗教的自由」を信条とした。ウィリアムズ自身，クェイカー派には疑念を抱いていたが，ユダヤ人には聖書の民の後裔として敬意を表したという。[13] 1764年に創立されたロードアイランド・カレッジ（後のブラウン大学）では，全学生に完全な宗教的自由を認め，ユダヤ人学生にはキリスト教教会での礼拝を免除した。大西洋沿岸のユダヤ系豪商たちがこの大学に寄付を惜しまず，またニュー・アムステルダム（後のニューヨーク）に次いで，ロードアイランドの港町ニューポートがユダヤ人第二の定住地となり，1776年独立当時の全住民7,500人の中ユダヤ系が1,200人を占めたというのも合点が行く。[14]

この港町に一握りのユダヤ人が初めて姿を現したのは1660年以前とされる。1654年にポルトガルが当時世界最大の精糖輸出港だったブラジルのレシフェをオランダから奪い返した結果，在住していたユダヤ人は異端審問を恐れ，16隻の船に分乗して四散した。その内の1隻が，男4人，女6人，子供13人のユダヤ人をニュー・アムステルダムに運び，集団としてはユダヤ人最初のアメリカ上陸を実現させた。[15] ニューポートへのユダヤ人移住はそのわずか4，5年後ということになる。その1世紀余り後に当たる1770年代には，「一握り」

Hosei University Repository

が1,200人に増えており，その繁栄ぶりはニューヨーク在住ユダヤ人のそれを凌いでいた。これは，自由の聖域ロードアイランドの噂が忽ちユダヤ人世界に広まり，カリブ海の諸島，イベリア半島，そしてイギリスからもセファルディー系移民が渡来したからである。彼らの使用言語は，ポルトガル語，カスティリア語，オランダ語，そしてうろ覚えの英語とヘブライ語だった。中層以下ではラディーノ語という中世カスティリア語とヘブライ語の融合言語が用いられていた。

2・2　アメリカ革命前後

1770年代に入って反英闘争が始まるころには，異教，異端を排除していなかったニューヨーク，ニューポート，チャールストン，サヴァナ，フィラデルフィアで，ユダヤ人は多種多様な職業に就いていた。彼らの多くは商人，貿易業者で，ヨーロッパ，南アメリカ，西インド諸島の各地に離散している肉親や仲間たちと連携しつつ，アメリカからは毛皮，亜麻，米，魚類，砂糖，藍など概して原料を輸出し，ヨーロッパ各地から加工品を輸入した。他の職種としては，医師，手工業者，小売商，銀細工師，鬘造り，時計屋，パン屋，肉屋などがいて，各植民地の発展に寄与した。[16] ニューポートのユダヤ人を代表するのはアーロン・ロペス一家で，1752年にポルトガルから渡来し，30隻の商船で西インド諸島やヨーロッパと交易した他，捕鯨や鯨油精製，それに奴隷貿易も手掛けた。[17] アメリカ革命以前，大西洋岸の総人口は約300万で，そのうちユダヤ系は僅か2,000人に過ぎなかった。それが半世紀後の1840年には15,000人，1850年には50,000人，1860年には150,000人，1880年には250,000人と膨張して行く。しかし1880年というこの時点でさえ，ユダヤ系がアメリカの総人口に占める比率は0.05%に過ぎなかった。[18]

微々たる人口ながら，ユダヤ人の経済活動は，上述のとおり植民地時代から盛んであった。昔からどの国でも法的権利を奪われ続けたユダヤ人だけに，独立宣言にうたわれた万民平等思想を介して，新生国家に活路を見出したのは当然である。海外貿易に携わっていたユダヤ系の商人たちは，イギリスの高圧的植民政策，とくに「航海条例」や「印紙条例」といった税負担加重に反発していたから，大半がアメリカ革命を支援した。革命勃発の25年前に鋳造された「自由の鐘」には，「全土の全住民に解放を宣言せよ」という『旧約聖書』（レビ記25: 10）からの引用が刻まれている。アメリカ植民地人は自らの反圧政闘

Hosei University Repository

争を，やはり古代イスラエル人のそれになぞらえていたのだ。独立戦争初期にニューポートがイギリス軍に占領されると，ユダヤ人住民の多くは利敵協力者になるよりも住居や店舗を棄て，西インド諸島，ニューヨーク，フィラデルフィア，また一部はマサチューセッツのウースターへ避難した。少数とはいえ，イギリス国王ジョージ3世に忠実なユダヤ人もいた。とくにイギリスから渡来したユダヤ人は，英軍が負ければイギリスの保護を失うことになり，何よりも母国に叛旗を翻すことに耐えられなかった。それに，イギリス国民が植民地人よりもずっと過酷な課税に悩まされていたことも事実であった。(19) しかし革命は革命である。ニューポートのユダヤ人社会で指導的地位にあった大商人アイザック・ハートは，親英派であったために，怒った群衆に殴り殺されてしまった。(20) ホーソーンの短編「わが親戚，モリヌー少佐」を地で行くような話である。

シカゴのフィールド広場に，ジョージ・ワシントンを挟んで左手に財務長官のロバート・モリス，右手にユダヤ人金融仲介業者のハイム・サロモンと3人いっしょの銅像が立っている。全植民地の代表者会議である大陸会議には徴税の権限がなく，植民地軍の軍資金維持は大仕事であった。イギリスと敵対していたフランスとスペインからの融資はすべて手形で，割引換金しなければならない。その引受人がポーランド生まれのユダヤ人サロモンで，イギリス経由で渡米し，植民地側の活動家と提携したため，英軍にスパイとして逮捕され死刑を宣告されたこともある。脱走してフィラデルフィアへ赴き，財政顧問としてロバート・モリスを助けることになった。ジェファーソン，ランドルフ，マディソンなど金策に追われていた大陸会議の議員らに対しても，私財から調達し，報酬を受け取らなかった。(21) しかし独立の成就に献身した彼の功績は，同族たるユダヤ人の社会的地位を確立させるという大きな報酬につながった。当時の世界でユダヤ人に他の市民と同じ経済的，宗教的，政治的平等を与えた国家は，新生アメリカを以て嚆矢とするからである。革命当時アメリカ人の半数は奴隷か年季奉公人であったが，ユダヤ人はそのどちらでもなかった。全員が自由の身であったのだ。植民地時代に社会的な反ユダヤ主義はほとんど存在しなかった，というのが通説である。

2・3　中欧ユダヤ人移民の展開

イギリスのユダヤ人は，1866年の「公共宣誓令」で正式に「キリスト教徒

Hosei University Repository

の宣誓」を免除されるまで，公職に就く道を閉ざされていた。ユダヤ人の再入国が黙認された1655年から数えて211年間も，信仰の相違ゆえに政治的権利を拒まれていたのである。その点，アメリカのユダヤ人は初めから恵まれていた。初代大統領ジョージ・ワシントンは，ニューポートのユダヤ人に宛てた書簡のなかでこう述べている――「一階級の人々が生得の自然権を行使するのを，他階級の人々が大目にみるという形で寛容を説く時代はもう過ぎました。と申しますのは，幸いなことに合衆国政府は，偏見を是認せず，迫害を助長しないという立場から，その保護下にある人々が，ただ善良な市民として常時政府を有効に支援することのみを要請するからです。」[22]

しかし合衆国憲法で保証された宗教的自由が，新生連邦の各州でも自動的に認められたわけではない。たとえば1776年制定のメリーランド州憲法では，当時のイギリスと同様，公職に就く資格として「キリスト教徒の宣誓」が要求されていた。「キリスト教徒が享有する特権をユダヤ教徒にも差し延べる」ための法案，いわゆる「メリーランド・ジュー・ビル」が，「ユダヤ人の知己を一人も持たない」スコットランド系の一議員の持続的な努力で可決されたのは，1826年のことである。第7代大統領アンドルー・ジャックソンの時代，つまり1830年代になると法的な宗教的束縛の痕跡はほぼ消えかかり，19世紀も後半に入ると，プロテスタントの牧師とユダヤ教改革派のラビが説教壇を交換するなど，ユダヤ人に対する態度は概して友好的だった。[23]

1820年頃のユダヤ系人口はざっと4,000人から5,000人で，[24] サロモンのように東欧出身の者も増えていたが，やはり先述のロペスをはじめリベラ，メンデス，セイクサスといった由緒あるセファルディー系が優勢を占め，彼らにアシュケナジー系即ち東欧系が感じる文化的，経済的劣等感は，ちょうど「ドヤ街のアイルランド移民」（Shanty Irish）がボストンの上流人（Brahmin）に感じるそれと大差なかった。しかしこの優勢も半世紀とは存続しなかった。

1820年から1870年までの50年間に，合衆国の人口は1千万から4千万に増えている。この3千万人の膨張は，中央ヨーロッパ，とくにドイツから押し寄せた移民の波から生じた。[25] 当時の国勢調査は，移民をドイツ，オーストリア，ボヘミア，ハンガリー，ルーマニアなど出身国別に集計しているので，ユダヤ人移民の比率を割り出すのは困難である。19世紀に入ってヨーロッパの人口は急激に膨張し，さらに産業革命の影響が大陸諸国にも及んで，キリスト教徒であれユダヤ人であれ，金持ちの企業家だけに有利な状況となった。貧富

Hosei University Repository

の差が開き，困窮した多くの農民が都会へ流れるか，あるいは移民に賭けた。がら空きになった田舎で旅館や商店を経営したり，種々の技芸で暮らしを立てていたユダヤ人は，生活の方途を失った。

ナポレオン敗北の後，ウィーン会議は旧体制への逆行を求め，その結果国民に一旦与えられた諸権利が，もちろんユダヤ人に与えられたそれも含めて無効となった。専制的反動政治に対する抵抗，つまり1848年の革命が失敗に終わると，「移民熱」が各地で起こって，1880年までにざっと500万のドイツ人がアメリカへ渡航し，そのうちユダヤ人は20万を数えた。その時点で，ユダヤ系アメリカ人の人口は40万から50万に達していた。(26)

身一つで上陸した移民にとって，資本を要する企業に乗り出すことは問題外であった。ヨーロッパでユダヤ人は農業に携わることを許されていなかったから，ドイツから来たユダヤ系移民も，開拓者に必要な伐採，耕耘，栽培などは手に負えなかった。道路工事，採鉱，重工業などは，仕事がきつい割に報酬や地位向上を伴わないと思われた。しかし彼らに冒険心が欠けていたわけではなく，必要とあればどこへでも徒歩で旅に出，苦労と孤独に耐えることはできた。開拓者生活に必要な日用雑貨類を背負えるだけ背負って，僻遠の地を渡り歩く仕事，つまり行商を彼らの多くが選び，先輩に当たる「コネティカット・ヤンキー」の後釜として，アパラチア山脈を突っ切る山峡カンバーランド・ギャップから北西諸州へ散って行った。ホーソーンは短編「イーサン・ブランド」のなかで，山から山へ渡り歩くユダヤ人行商の一種であるディオラマ講釈師を「彷徨えるユダヤ人」に仕立てあげている。

行商といっても運が良かったり，目先が利いたりすれば，やがて徒歩でなく，馬車を駆って，農器具，大工道具，鍋釜，布地といったより重い商品をより多く捌けるようになる。繁盛しそうな土地が目についたら，雑貨店，金物店，洋品店を開く。蓄えが十分になったら，郷里に残してきた妻子や兄弟を呼び寄せる。このように成功した例がある一方で，行商を続けながら，ついには放浪者に落ちぶれる敗残の例もあり，後者の場合別れた家族と再会することはまずなかっただろう。

彼らはゴールド・ラッシュの現場にも居合わせて，試掘者らの需要を満たした。リーヴァイ・シュトラウスが，バーラップ（黄麻繊維の粗布）を材料として，どんな荒仕事にも耐え，道具や鉱石を入れても破れないようにポケットをリベット留めにした「リーヴァイ」で人気を博し，その大量生産で財をなした

Hosei University Repository

ことは有名である。行商が粒々辛苦の末開いた商店のいくつかは，やがてアルトマン，メイシー，ブルーミングデイル，ギンベルといった大百貨店へと発展する。ペンシルヴェニアで行商としてスタートをきり，やがてワイオミングで採鉱・精錬の大立者となるメイアー・グゲンハイム一家は，その名を冠した学術助成財団や美術館で世界中に知れ渡っている。

行商以外の仕事としては，洋裁，醸造，時計や靴の製造，大工，狩猟，種々の技芸を手掛け，1848年革命後に亡命してきた知識層は新聞編集者，医師，弁護士になったり，政界入りする者もいた。投資銀行クーン・ロウブ商会の共同経営者ソロモン・クーンも移民第1世代に属する。第2世代からは，著名な官僚や裁判官が輩出する。たとえば，セオドア・ローズヴェルトの下で何度も商務長官や労働長官を勤めたオスカー・ストロースは，ユダヤ系最初の連邦政府長官である。ヘンリー・モーゲンソーは駐トルコ大使としてパレスチナ・ユダヤ人の保護に寄与し，国際連盟難民問題委員会の議長として敵対関係にあったギリシャ，トルコ両国の難民交換に尽力した。彼の息子で同名同姓のヘンリー・モーゲンソー2世は第3世代ということになるが，フランクリン・ローズヴェルトの下で1934年から1945年まで財務長官を勤め，ニュー・ディール政策や第2次大戦中の軍事目的遂行の大立者であった。歴代最高裁判事の中でもとくに出色とされるルイス・ブランダイスの父はボヘミアからの移民，同じくフェリックス・フランクファーターの父はオーストリアからの移民であった。

故国で市民権も言論の自由も剝奪されていたドイツ系移民，とりわけユダヤ人にとって，機会均等のアメリカは，同化して悔いのない国であっただろう。まさに水を得た魚で，機転と勤勉に物言わせて行商から小売店へ移行してゆく自由競争には，アメリカにおける企業発展の一面が反映しているし，第1世代から第2世代にかけて知的職業各分野で成就した絢爛たる開花も同じ根につながるものだろう。

ユダヤ人がオハイオ州シンシナティーに初めて定住したのは1817年で，1850年には2,500人，1860年には10,000人と膨張しつづける。[27] ユダヤ教を新環境に適応させるため，アイザック・メイアー・ワイズらが改革派を組織し，この都市をその大本山と定めたことも，その人口膨張の一因だろう。ラビが英語で説教を行い，賛美歌斉唱もオルガン演奏付きという改革派の礼拝は，正統派からキリスト教まがいと非難されたが，もはやヘブライ語を解しない

Hosei University Repository

一般の会衆からは歓迎されたことだろう。以来シンシナティは，アイザック・リーサーを指導者とするユダヤ教正統派の砦フィラデルフィアの向こうを張ることになる。リーサーでさえ，祈禱はヘブライ語で唱えながらも説教は英語で行い，ヘブライ語の経文を英訳してその意味内容を会衆に理解させようとした。[28] この礼拝様式の改革も，ユダヤ系移民による文化受容の一環と考えられる。

2・4　南北戦争前後

平時であれば，移民の文化受容つまり同化は緩慢に進行するものであろうが，1861 年に始まった南北戦争は，北部と南部のユダヤ人を一挙にアメリカナイズしてしまった。奴隷解放に賛成か反対か態度を決め，それぞれの信念に従って行動しているうちに，おのずとアメリカ的生活のなかへ溶け込まざるを得なかった。約 1 万のユダヤ人が従軍し，その大半は北軍に属していた。ヨーロッパで迫害を体験しているだけに，奴隷制度には当然反対するものと思われようが，とくに南部で生活基盤を築いたセファルディー系のユダヤ人は，「特殊事情」を唱えつつ奴隷制度を受容しがちだった。北部のラビたちも，それぞれ聖書に拠って，賛否両論を展開した。奴隷が人間的に処遇されている限り，聖書でも奴隷制度は認められる，という発言もあった。しかし結局，神がイスラエルの民をファラオの桎梏から解き放ったことこそ，聖書に見出される反奴隷制度の最も強力な論拠だ，という主張に傾いたようである。[29]

南北戦争が始まるまで，従軍僧はプロテスタントの牧師に限られており，開戦後にカトリックの神父も認められたが，ユダヤ教のラビだけは除外された。指揮官フリードマン大佐はじめ将兵の多くをユダヤ系が占める第 5 ペンシルヴェニア騎兵隊で，マイケル・アレンというユダヤ人が従軍僧として勤務しているところを，YMCA の職員に目撃されてしまった。アレンは無宗派の身分で，死の恐怖，戦争目的に関する疑惑といった戦場で一般的な問題を扱っていたのだが，病弱という理由で退職させられる。代役として選ばれたアーノルド・フィシェルという別のユダヤ人が，従軍僧としての任官を申請したところ，やはり拒否された。改革派も正統派もユダヤ人社会あげてその不当を訴え，正統派ラビのリーサーは，一種類の市民だけを公職から排除するとは，アメリカ民主主義の構造全体が危殆に瀕していると述べた。開戦の年の暮れにフィシェルがリンカーン大統領に直訴した結果，翌 1862 年 7 月にユダヤ人も

Hosei University Repository

従軍僧として服務できるようになった。

南北両軍が対峙していたテネシー州の前線で，北部の交易業者が，貴金属や医薬品などを南部の綿花と交換して暴利を貪り，それに軍関係者も関与していることが判明した。綿花の値段は1860年12月に1ポンド10セントだったのが，1862年12月には68セントに釣り上がり，なおも騰貴中だった。(30) この交易をめぐって政府内部の命令系統に混乱が生じ，贈収賄と腐敗が蔓延した。1862年12月17日グラント将軍は「ユダヤ人を，財務省制定のあらゆる交易規定に違反している一味として（'the Jew, as a class violating every regulation of trade established by the Treasury Department'），24時間以内に審理審問なしでテネシー軍管区から追放する」旨の一般命令第11号を布告した。荒稼ぎした闇商人の一部がユダヤ人であったことは事実としても，グラントは作戦妨害となったこの闇取引犯人の同類項としてユダヤ人だけを特定している。このときも，追放されたユダヤ系商人の一人がリンカーン大統領に直訴したところ，大統領は同情して一般命令第11号の即時撤回を求め，結局同命令は1か月足らずで無効となった。

ユダヤ人側から同命令に含まれた偏見を公式に非難してほしいという要望が上下両院に寄せられたが，両院ともその決議案を棚上げにした。言論界では，一部の新聞がユダヤ人を「どぶ浚い的商人」と罵倒したのに対し，ニューヨーク・タイムズは，「犯人の名を挙げることなく，一種類の人々に汚名を着せた」として，グラントの「命令」を「この戦争で生じた最も深刻な事件」と呼び，「良識と正義に反し，共和主義とキリスト教精神に反する」と指弾した。(31)

グラントの「命令」で明らかになったのは，普段休眠状態にある古来の芳しからぬユダヤ人像が，国家的危機の勃発で一挙に息を吹き返すということである。危機に際して困窮すると，人々はスケープゴートを求める。戦争による抑圧が高まるにつれ，無知な偏見に基づく反ユダヤ主義，ユダヤ人いじめが，これまでになく全国に広がった。以前ユダヤ人に反感を示したためしのないグラントが，戦時中にあのような命令を出したことからも，この現象は理解に難くない。戦後の大統領選でグラントは，この事件に遺憾の意を表し，当選後は多くのユダヤ人を公職に付けた。ルーマニア政府にユダヤ人迫害を止めさせるため，ユダヤ系の公使をブカレストに派遣したこともある。

結局グラントの「命令」は，北部と南部の両方に蔓延していた反ユダヤ的誹謗の一例に過ぎなかった。とくに誹謗の対象がユダヤ系の政府要人となれば，

Hosei University Repository

火に油を注ぐようなものだった。南部連邦で国務長官，法務長官，国防長官を歴任したジューダ・P・ベンジャミンは，南北を問わず言論界の好餌となり，南部の敗戦の責任は「あの忌まわしいユダヤ人」（'that infamous Jew'）つまりベンジャミンに転嫁された。産業基盤を持たず，海上封鎖で物資の搬入も途絶え，物価が騰貴していた南部で，ユダヤ人はあらゆる商品を買い占め，戦時インフレを引き起こしたことにされた。勇敢な兵士が戦場で斃れているのに，ユダヤ人は徴兵忌避と通敵行為に走り，ユダヤ商人は民衆を搾取して蓄財に専念していると噂された。このユダヤ人像が南北を問わず，意識的にせよ無意識的にせよ，戦時中の憤懣のはけ口となった。

従来ユダヤ人実業家は，俊敏かつ機略に富む商才，またそれを押し進める強烈な目的意識ゆえに，アメリカならではの進歩的経済勢力として称讃され，資本主義の長所と関連づけられていた。ところが南北戦争中から，彼らを資本主義の悪弊と直結させる傾向がにわかに強まってきた。万事欲得ずくで手段を選ばぬ奸商という古来のシャイロック的ユダヤ人像が，ヨーロッパ諸国におけると同様アメリカ社会にも浸透し始めた。

南北戦争後のアメリカでユダヤ系市民が受けた差別は，戦時中に彼らが被ったスケープゴーティングの延長だろう。1877年夏にニューヨーク州サラトガのグランド・ホテルで，戦時中リンカーン大統領を財政面で支えた大銀行家のジョーゼフ・セリグマンが，家族とともに宿泊を断られるという象徴的な事件が起こった。「ユダヤ人と犬の立入り禁止」という沙汰になって，憤慨の余り，何人かのユダヤ人富豪は，グランド・ホテルよりもっとましなホテルを次々に買収して，サラトガをユダヤ人向きの行楽地にしてしまった。[32]「サラトガの戦い」でたしかにユダヤ人は勝ったけれども，ユダヤ人排除の動きは，他の保養地，さらには社交クラブへの出入りを始め，就職や居住地域の選択，私立学校，大学とりわけ医学部への入学にまで波及したから，結局「バトル」に勝って「ウォー」に敗れたことになる。このような社会的差別は，戦後のいわゆる「金ぴか好況時代」に，急激な工業化で財をなした新進企業家の群れが上層へと食い込み，それに体制側エリートが脅威を覚えたこととも関連している。ユダヤ人に対する差別は，彼らにユダヤ人としての分際を弁えさせ，体制側エリートおよび同じワスプ出身の新富裕層に社会的地位を保たせる，という2つの目的に役立った。[33] 戦後に鉄鋼，石油，鉄道，造船，石炭，薬品等の分野で膨大な帝国が築かれたが，いずれもワスプ資本家の手中にあり，経営執

Hosei University Repository

行部への登用はワスプ系に限られた。当時ユダヤ人が進出できた領域は，銀行業と小売業だけといってよい。このような差別は，1920年代，1930年代，そして第2次大戦終結の頃まで止むことがなかった。(34)

主としてドイツから渡航してきた第2波のユダヤ系移民は，ヨーロッパのユダヤ人街では思いも寄らぬ地位向上を，他の移民集団に先んじて達成していた。1850年から1880年までに渡米した第2波ユダヤ系移民中の1万人を対象に行われた調査によれば，1890年までに1,000人が召使を3人以上，2,000人が2人，4,000人が1人抱えており，半数が実業家，20人中1人が知的職業に就いていた。まだ行商をしている者は，100人中1人の割であった。(35) アメリカ既成社会がユダヤ系の急成長つまり「成り上がり」ぶりに抱いた脅威と軽蔑の複合的感情は，当時の新聞雑誌に掲載されたユダヤ系移民揶揄の記事や風刺漫画からも窺える。(36) そのようなマスコミの扱いは，すでにアメリカ社会の一部と化していた第2波のユダヤ系移民と，1880年代から着の身着の儘でやって来た東欧ユダヤ人移民を区別しておらず，以後先着の「ドイツ・ユダヤ系」市民は，新来の「哀れな従兄弟」にどう対処するか苦慮を迫られる。何から何まで慣習を異にし，おまけに社会主義，無政府主義といった危険思想まで抱えた東欧ユダヤ人，即ち第3波のユダヤ系移民が，1920年代までに無慮200万人も押し寄せてくる。この大異変で移民排斥運動（nativism）が起こるのは時間の問題だし，アメリカ社会主流は決然と「ユダヤ人一統」（'the Jew as a class'）を仲間から外す態勢に入って行く。

3．文学的ユダヤ人像の形成
——ロングフェロウからホーソーンまで——

3・1　前置き——伝説と現実の間

これまでの歴史的記述から，アメリカ文学におけるユダヤ人像の歴史も，合衆国における反ユダヤ主義の歴史と重なり合うことが推察できる。合衆国憲法第1修正から第10修正までの「権利章典」によって，アメリカのユダヤ人は法的に自由と平等を保証されたわけだが，これで反ユダヤ主義が消滅することにはならなかった。過去一千年以上にわたってキリスト教徒とユダヤ人は，宗教面だけでなく経済面，社会生活面でたがいに隔絶されていたのだし，その隔絶を生ぜしめたキリスト教徒側は，ユダヤ人に対する疎外を正当化しなければ

Hosei University Repository

ならなかった。ユダヤ人をキリスト教社会に平等な市民として迎えることができない理由はなにか，具体的に提示しなければならなかった。イスカリオテのユダ，シャイロック，「彷徨えるユダヤ人」などを祖像とする諸々の「ユダヤ人像」がこのようにして生まれ，キリスト教世界全体に広まった。そのキリスト教徒の植民先がアメリカなのだから，たとえ新世界であっても「ユダヤ人像」は根づくのである。したがって，1890年代に本格的な反ユダヤ主義が猖獗するまで，アメリカの文学作品，演劇，寄席演芸，漫画などにおけるユダヤ人像に軽蔑や敵意は含まれていなかった，という説は首肯しがたい。

1870年代のユダヤ人描出にそのような軽蔑や敵意を見出せない一例として，オスカー・ハンドリンは，チャールズ・フォレン・アダムズ（1842–1918）の“Leedle Yawcob Strauss”と題された一連のユーモア詩を挙げる。[37] Little Jacob をドイツ系移民の訛りで発音すれば「リードル・ヨーコブ」になるのだろう。このドイツ訛りがユーモアの中心をなしており，情にもろく親切な雑貨屋の「ヨーコブ」はいつもビールとパイプを手放さないという具合に，「まったく好意的に描かれている」というのだ。しかしハラップによれば，この「ヨーコブ」をユダヤ人とみなすべき証拠はないという。たしかに当時はドイツ出身のユダヤ人と非ユダヤ系のドイツ人を区別することが必ずしも容易ではなかったらしい。しかし作者のアダムズは，同じ詩集に載っている「鼻物語」（“A Tale of the Nose”）という別の詩のなかで，ドイツ人とは明らかに異なるユダヤ人を描き出している――巨大な鷲鼻をもったオールド・モーゼというユダヤ人がいて，その鷲鼻に絶え間なく嗅ぎタバコを詰め込んでいた。ある日奥方からキスを奪ったドイツ野郎を殴りつけようとして，逆に鼻を根っこから削がれてしまった。あわてて地面に落ちた鼻を拾い上げ，包帯でくっつけたまではよかったが，治ってみると上下さかさまになっていた。どんな大損をしても少しは得があるものだとモーゼはおどけ，前よりもたっぷりと嗅ぎタバコを詰める算段をしたけど難題が一つ残っている。そりゃ嗅ぎタバコは詰めやすくなるだろうけど，くしゃみがしたくなったら逆立ちしなけりゃならん。[38] このオールド・モーゼが「リードル・ヨーコブ」同様「まったく好意的に描かれている」とはたしかに考えにくい。

反ユダヤ主義はそれぞれの時代に現存する社会悪の徴候である，という歴史的観点から「ユダヤ人像」を取り上げたのがモダーであり，他方，反ユダヤ的偏見はそのような社会・経済的問題であるよりも，むしろ思想停滞という精神

Hosei University Repository

病理的問題であって，神話的類型としてのユダヤ人像は社会の一部にいつまでも残るものだ，と説いたのがローゼンバーグである。[39] 人間の精神内部には現実と伝説が併存しているのだから，両者のうち一方の見解だけを認めることはできない。しかしハンドリンの認識が，モダーの観点からしても，またローゼンバーグの観点からしても甘すぎたことは事実だろう。ハンドリンは，19 世紀末葉以来アメリカのユダヤ人社会に襲いかかった反ユダヤ主義が，ヨーロッパのそれに匹敵するほど激化しているという新事態に圧倒されて，それ以前に厳存していた反ユダヤ的偏見を過小評価していたのかもしれない。

そのような過小評価もあながち否定できないほど，南北戦争以前に活躍したアメリカの作家や詩人たちは，ユダヤ人の存在をほとんど関心の外に置いていたともいえよう。ユダヤ人に出会ったこともなく，無意識のうちに民間伝承として流布していたユダヤ人像を鵜呑みにしたり，イディオムの一部として取り込まれていたユダヤ人に対する軽蔑語を使ってみたこともあろう。何気なく旧来の反ユダヤ的な慣習に従ってしまう場合から，意識的に激しく反ユダヤ的な信念を訴える場合まで，反ユダヤ主義の現れ方はさまざまだが，もちろんこれと対蹠的に親ユダヤ的な感懐を洩らしたくなる状況もあり，非ユダヤ人にとって，自らのユダヤ人像に平衡を保たせることは至難の業である。その至難の業にアメリカの著名な詩人・作家がどう取り組んだか，ユダヤ人に対する愛憎好悪のアンビヴァレンスをどう表現表象したかを，以下で検討して行きたい。

3・2　ロングフェロウ――「ニューポートのユダヤ人墓地」

マサチューセッツ植民地から異端として追放されたロジャー・ウィリアムズ以下の清教徒らがナラガンセット湾に上陸したのが 1636 年，その 3 年後に開かれた港町がニューポートで，そこにユダヤ人が初めて定住したのは 1658 年とされている。[40] その真偽はともかく，1677 年にユダヤ人墓地が設けられたことは事実であり，1763 年には国定史跡として有名なシナゴーグも建てられた。ニューポートは，先述のとおり，1775 年から始まった革命戦争でイギリス軍に占領され，その際ユダヤ系住民の多くが家財を抛って四散したので，三角貿易の繁栄で名を馳せたニューポートのユダヤ人社会も，わずか 1 世紀余りで消滅してしまう。その後 1880 年代に東欧ユダヤ人の移民の波が押し寄せるまで，この町にユダヤ人はほとんどいなかったというから，1852 年 7 月 9 日に詩人ヘンリー・ウォズワース・ロングフェロウ（1807–82）がこのユダヤ人

Hosei University Repository

墓地を訪れたときの寂れようは，想像に難くない。

詩人の当日の日記によれば，「墓らしい墓はあまりなく，たいていは横たえられた大理石の墓石で，ヘブライ語の碑銘に英語かポルトガル語が少々付け加わっている。埃っぽくて人通りの多い街路が交差する街角の陰になった一隅を占め，当地出身の父を持つニューオーリンズの大商人トゥーロ兄弟が浄財で鉄柵と花崗岩の門柱をしつらえた。墓の一つを覆うようにしだれ柳が生えている。セントヘレナのナポレオンの墓の上に垂れている柳の子孫らしい。」[41] この寂れた墓地に佇み，全盛時のユダヤ人を偲びながら構想したのが，「ニューポートのユダヤ人墓地」（“The Jewish Cemetery at Newport”）である。

「壮麗を誇ったシナゴーグはその玄関を閉ざし，その壁にダビデの詩篇がこだますることもない。預言者の荘厳な言葉で十戒を読み上げるラビの姿もない。」（第6連）キリスト教徒の憎悪と迫害を逃れて，ユダヤ人はニューポートへやってきた。彼らは外地の狭く暗いゲットーで泥にまみれて暮らしていた。「誇りと屈辱が相共に，世界のどこへでも彼らとともに歩んだ。砂のごとくに彼らは踏みにじられたが，それでも大陸のごとく揺るがなかった。」（第12連）しかしアメリカ新大陸で彼らはその自由な雰囲気に呑み込まれ，もはや孤高の存在ではなくなった。墓地のなかでのみ，彼らは栄光ある過去の死せる遺物として生き残っている。ユダヤ人に復活の望みはない。「悲しいかな，かつて在りしものは消えるほかない。懊悩と苦痛に呻きながら世界は諸々の種族を生み出すが，蘇らせはしない。死せる民族が再び立ち上がることはないのだ。」（第15最終連）[42]

ユダヤ人迫害の歴史に深い同情を寄せながらも，このしめくくりのスタンザでユダヤ人に将来はないと言い切っている。当時合衆国で暮らしていた数少ないユダヤ人の特殊な現実よりは，栄光ある過去の文化的遺産と，その継承者たり得た彼らの先祖の方に真の興味を示したのである。セファルディー系移民の第2世代で，自由の女神像の台座に刻まれた「新しい巨人」（“The New Colossus”）の作者エマ・ラザラスが，「ロングフェロウは知的にも芸術的にも，エマソンやホイットマンよりアーヴィング・ワシントンに近い。彼には未来の源泉を洞察する預言者の眼がないだけではなく，現在という活舞台で立ち働く凛とした闘士のエネルギーも情熱もない」と喝破している。[43] ロングフェロウはタルムード説話集のような書物に拠って聖人君子的なユダヤ人像をいくつか描いており，学問的，文化的関心の強さは疑えない。[44] しかし「温故」のみが

Hosei University Repository

あって「知新」の方は欠けていたと考えざるを得ない。上に挙げた「ニューポートのユダヤ人墓地」についても，もし同時代的な現実を持ち出したら，苦悩に耐えた偉大な民族の死滅という悲哀の情に混濁が生じて，叙情の統一性が損なわれてしまう，といった懸念が窺われる。

3・3 ホイッティアー――「ラビ・イシュマエル」他

ロングフェロウと同時代の詩人で，聖書中の，また聖書以後のユダヤ的題材に彼よりもいっそう情熱的に打ち込んだのは，ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアー（1807−92）だろう。神の啓示は全人類に身分の上下を問わず遍く伝わるものだから，いかなる宗教も神を独占することはできないという彼の主張は，クェイカー教徒の貧しい農家に生まれ，少年の頃ロバート・バーンズを愛読し，やがて奴隷解放論者になったという伝記の記述からも推察できる。「真理は我らにも他者にも同一である。自由の空気を瓶に詰め，陽光を蓄える者がいるだろうか？」[45]

彼は聖地に烈しく憧れながら，ただ想像のなかだけでパレスチナの山野を駆けめぐる他なかった。初期の詩「パレスティナ」から数行引いてみよう――「イエスが立っておられた場所を自分の足で踏めなくても，どうということはない。……父なる神に愛されたイエスの霊が，近くにおはすからだ。……外面的なものは消え去っても，霊的なものは輝かしく力強く時間を超えて生き残る」[46] このようにひたむきなキリスト教信仰が，『旧約聖書』や『タルムード』から題材を得たときでさえ，終始保たれていた。

1847年に彼は，「二人のラビ」（“The Two Rabbins”）という感動的な詩をものしている。ラビの一人はネイサンといい，この邪悪な世界で大過なく生きてきたが，50歳になって誘惑に抗しきれず，惨めにも罪を犯してしまった。彼は賢人また義人として名高いラビ・ベン・アイザックに罪を打ち明けるためメディア（ペルシャ）のエクバタナへ向かう。その町の城門で彼を待ち受けていたのは，何と彼に会って自らの罪を慰めてもらおうと旅立ちしたばかりのベン・アイザックだった。「兄弟同志たがいの悩みをわが悩みとし，……ついに立ち上がって抱擁しあったとき，二人は相手の顔に神の許しをみた。」[47] ラビ・ネイサンは，自分の墓石に「己れが死ぬまで罪が癒されると思うな。愛に尽くして罪を忘れよ。汝の力で払えない負債を天使は忘れてくれるだろう。独りで来る者に天国の扉は開かれない。一つの霊魂を救え，そうすればその霊魂

Hosei University Repository

が汝自身の霊魂を救うであろう。」この愛による救済という考え方が，ユダヤ人の読者には「ユダヤ的伝統のキリスト教化」という風に受け取られてしまうようだ。

もう一つ，「ラビ・イシュマエル」という『タルムード』に拠った詩がある。[48] 原典によれば，高僧イシュマエル・ベン・エリシャが香を焚くため至聖殿に入ったら，万軍の主，神が玉座に坐っておられ，僧の祝福を請われた。イシュマエルが「人の子に対する貴方様の憐れみが怒りに勝りますように」とお答えしたら，神は頷いて承諾なさったようにみえた，というのである。『タルムード』のこの一節に感銘を受けたものの，キリスト教徒としてホイッティアーは，神が人の祝福を求めるという箇所にこだわらざるを得なかった。したがって彼の詩では，神がイシュマエルに祝福を請うのでなく，「汝はいかなる祝福を欲するか」とご下問になる。そこでイシュマエルが「全能の神よ，われら弱く小さき者に憐れみを垂れたまえ」と沈黙のうちに心底からお祈り申し上げたら，永遠の主はその祝福を欣然と賜わった，という運びになる。原典の含意は，人が神の祝福を必要とするように，神も人の祝福を必要とするという点にあり，リプツィンによるとこの詩は，「ユダヤ教に材を得ながらも，キリスト教的情念に溢れている」という。[49] しかし，ホイッティアーが敢えてキリスト教徒の立場から原典の「アガダー」に改変を加えたのも止むを得ぬ仕儀であり，これを反ユダヤ的歪曲と取るべきではない。むしろ「磔刑」（“The Crucifixion”）という詩で，イエスの受難をパリサイびとの責めに帰せしめるような言辞は一切用いず，イエスの死が天地とともに罪深き人間をいかばかり震撼させたか，その圧倒的感化に表現を絞っている点は特筆に値する。[50] 「磔刑」に反ユダヤ的感情を纏わせないことの難しさは，キリスト教徒の精神的支柱たる『新約聖書』の内容に照らしても明白だからである。

3・4　ホームズ――「無言劇の教え」他

反ユダヤ主義に対して最も決然たる態度を示したニュー・イングランドの詩人は，オリヴァー・ウェンデル・ホームズ（1809–94）だろう。留学していたパリから両親に宛てた 1834 年 11 月 4 日付の手紙のなかで，自分はあらゆる種類の人々と出会っており，ユダヤ人と非ユダヤ人の相違は，以前に本を読んで推測していたよりもずっと少ないことを知ったと述べている。[51] その認識を鮮やかに表した詩が「アモスとジューダ」である。ニューオーリンズのユダヤ系

Hosei University Repository

商人ジューダ・トゥーロとボストンの非ユダヤ系商人アモス・ローレンスがバンカー・ヒル戦闘記念碑の建立資金を1万ドルずつ分担し，1843年6月17日タイラー大統領臨席の下にその除幕式が行われた。その記念晩餐会でホームズは，二人の愛国的篤志を讃える詩を朗誦した――アモスとジューダ，古より敬われた名を持つキリスト教徒とユダヤ教徒の二人が，並んで疾駆する駿馬のごとく，一つの計画を遂行する。「信仰の違いこそあれ，心情において二人は同じ人間なのだ。」（'Christian and Jew, they carry out one plan,/For though of different faith, each is in heart a Man.'）(52)

随筆集『朝の食卓の教授』（1859）のなかでも，「ユダヤ人が金貨を摩擦して金粉を削ぎ落とす（'sweating gold'）という話しは，彼らを憎悪の対象とし，彼らから財宝を略奪する口実を設けんがためにでっち上げた嘘八百のうちの一つに過ぎぬ」と述べている。(53) キリスト教徒が謙虚になり，自己を過大評価しなくなれば，反ユダヤ主義は消えるだろうというのだ。その彼が，我知らず内心に取り込んでいた偏見を悟らされた，という内容の詩を書いている。

「ヘブライ人の話」という題で1856年に一旦発表されたが，1874年に「無言劇の教え」（"At the Pantomime"）と改題の上出版された。八月のある暑い日ページェントに出掛けたら会場は超満員で，聴衆のなかに真っ黒な髭を生やし浅黒い膚をしたヘブライ人と，東洋風の黒い瞳をして宝石で飾りたてた女が何人かいる。彼らの間にいると居心地が悪くて，左側にいる鷲鼻のユダヤ人は卑劣な高利貸，金貨から金粉を削いでいる泥棒や詐欺師ではないかと想像する。キリスト殺しの末裔がここにいると感じ，ユダヤ人がキリスト教徒の幼児を捕らえて十字架にかけた恐ろしい話を思い出す。しかし，ショーが進むにつれて彼の良心が疼きはじめる。ふと右隣を見たら，オリーヴ色の膚，黒い縮れ髪，穏やかで愛情に満ちた目をしたユダヤの少年で，聖母マリアから生まれたベスレヘムの男児もかくやと思われた。栄光の主がヘブライ人に身をやつされたとしたら，そのヘブライ人と比べて，己れの先祖たるノルマン人の盗賊，デーン人の海賊にいかほどの分があろうか。突然目の前から霧が晴れるように，わが魂から影が消え去り，唇に囁きが洩れた――「汝イスラエルびとに平安あれかし。」（'Peace be upon thee, Israel!'）(54)

1877年にサラトガ・スプリングスのホテルでユダヤ人銀行家ジョーゼフ・セリグマンの一家が宿泊を拒絶された事件は，先述のとおり激化しつつあった反ユダヤ主義の象徴となった。『アメリカン・ヒブルー』誌がこの反ユダヤ的

Hosei University Repository

風潮に関して4項目のアンケートを著名人に送り，ホームズもその一人として回答を寄せている。[55] 第1の質問「ご自分の経験からして反ユダヤ主義は正当とお考えですか」「ノーです，まったく！」（'No, indeed!'）第2の質問「キリスト教の教育が反ユダヤ主義の原因でしょうか。」「もちろんそうではありません。」（'Certainly not!'）第3の質問「ユダヤ人の行動は，同じ社会的地位にあるキリスト教徒のそれと異なるでしょうか。」「いいえ。育ち方や気質で多様性が生ずるのは，キリスト教徒もユダヤ人も同じです。」第4の質問「偏見を拭い去るには何をすべきでしょうか。」「キリスト教徒をキリスト教徒たらしめなさい。」この毅然たる人間直視の態度は，合衆国最高裁判事として「リアリズム法学」を説き，「偉大な少数意見者」と称された同名の息子に脈々と受け継がれている。

3・5　通俗小説2編――『クェイカーの都市』（G. Lippard）と『行商』（O. Ruppius）

メルヴィル作『レッドバーン』の第4章「鳥打ち銃始末記」は，航海前のレッドバーンが，ニューヨークのチャタム通りの金の球3つを吊るした店，つまりユダヤ人の質屋で鳥打ち銃を処分しようとして，鉤鼻の男たちのあこぎな商売に呆れ果てる話である。最初の店の指し値3ドルに不服で，次の店に行ったら1ドルが精一杯だといわれ，元の店へ戻ったら2ドル50セントしかもらえなかった。先に入った質屋の主の風体は，「縮れ毛の頭に，浅黒い，油光りの顔，鉤のように尖った鼻をした，イスカリオテのユダの絵のような，ちびの男」である。次の店でも鉤鼻の男が質草を「手当たり次第にその鼻でひっかけている風だった。」[56] あこぎな商売という説明はそれとして，容貌の方は，『オリヴァー・トウィスト』のフェイギン並の描き方である。メルヴィルは，晩年に書いた長詩『クラレル』のなかで，登場するユダヤ人を個々にきめ細かく描いている。その彼が，たとえ27年前に発表した作品のなかであれ，古来のステレオタイプを丸出しにしてしまうのだから，一般の事情は推察に難くない。「実際の社会関係と，思想に染み込んだ固定観念との間には一線を画さなければならない。良好な関係が普及していたからといって，ユダヤ人に対するアメリカ人の態度が全面的に友好的だったことにはならない」というジョン・ハイアムの指摘は，[57] まさに「ユダヤ人像」研究の基調をなす考え方である。時代によって濃淡の差は生じようが，19世紀後半こそは，反ユダヤ的な固定観念

Hosei University Repository

の影が「良好な関係」をみるみる覆い始めた時期なのである。

南北戦争前に最も広く読まれた大衆小説の1冊として，ジョージ・リパード作『クェイカーの都市』(1845) がある。[58] リパードは，農民や貧困層の不満を異人恐怖的偏見とりわけ反ユダヤ主義に結びつけた一種のポピュリストで，キリスト教の偽善，法律の不公正に怒ってジャーナリストとなり，とくに1万ドルの遺産が銀行の不始末でふいになったあと，この小説のなかでフィラデルフィアの有力者と金満家の腐敗と不正を煽情的に暴露した。『クェイカーの都市』は，フィラデルフィアの一上流紳士が，自分の妹を誘拐して淫売窟に売り飛ばした仲間に復讐するという実話に基づいており，そのメイン・プロットに淫売窟を根城とする悪徳紳士どもの信用状偽造がからむ。

この小説の元の表題は「淫売窟マンク・ホールの坊主たち」("The Monks of Monk Hall") で，「坊主たち」とは上記の悪徳エリートどもをさし，「僧正」(abbot) が彼らのボスである。このボスの公金着服を容易ならしめるために信用状を偽造したのが，ガブリエル・ヴァン・ゲルトなるユダヤ人だ――「彼の頭は，人体にくっついた馬の頭だ。彼の両肩は耳のところまでせりあがり，背中の醜い瘤は頭の輪郭の上に見える。道楽者で道学者だったソロモン王の時代にエルサレムの神殿で眠りこけてしまい，3千年の昼寝の後で完全なヘブライ人のまま，このクェイカーの都で目を覚ましたような，〈ユダヤ人でござい〉とはっきり顔に書いてある奴だ。」[59] 結局彼は偽造料一万ドルの渡し役になった後家を殺害したり，偽造を依頼した「僧正」らを強迫したり犯行を重ねているうちに，正義漢の主人公に捕まってしまい，秘密漏洩を恐れた「坊主」たちの手で縛り首にされてしまう。

ゴシックとメロドラマとポルノに社会批判と反ユダヤ主義をごたまぜにしたこの小説が，刊行後5年のうちに175,000部も売れ，とくにその戯曲版の上演が市長命令で禁止された後は，5か月で48,000部という売れ行きだった。[60] 『クェイカーの都市』が時好に投じた一因は，その奔放な反ユダヤ的罵倒にあった。

この小説は，ほぼ同時期に刊行されたディケンズ作『オリヴァー・トウィスト』やウジェーヌ・シュー作『彷徨えるユダヤ人』の影響を受けていたと考えられる。リパードのユダヤ人像は，当時のイギリスやヨーロッパ諸国で流布していた悪魔的ユダヤ人像を鵜呑みにしたもので，現実のユダヤ系アメリカ人と関連づけることは無理だろう。

Hosei University Repository

*　　*　　*

人非人ヴァン・ゲルトと好対象をなすのが，オットー・ルッピウスの『行商』に描かれた人格者ヒルシュである。1848年の革命に加担した廉でドイツを追われた作者のルッピウスは，中西部各地で，平日は行商に励みながらも安息日の戒律を守り，隣人に誠実なユダヤ人と出会った経験から，ミルウォーキー滞在中の1853年にこの小説を書いた。(61) 主人公ヘルムシュテットは，若い亡命法律家で，彼のような新来移民を狙っている詐欺師の餌食にされてしまう。その窮地から彼を救うのは年老いた行商ヒルシュだが，「抜け目ない顔付きで，鼻筋の曲がり方が著しいから，きっとユダヤ人だ」と若者は警戒する。「ユダヤ人が何かしてくれるとしたら，必ず一儲けを企んでいるからだ」と疑心をそのまま晒けだす。それでもヒルシュは若者のために会計の仕事を探してやり，感謝する彼に向かって「君が最初に言ったことを忘れるな。空手形じゃ，わたしの儲けにならない。君の感謝が金になるかどうか証明してもらおう」と言ってのけ，実際に顧客の信用調査をさせる。このように厳しさを示しながらも，陰に陽に若者のことを気遣い，彼が恋人殺害の廉で逮捕されると嫌疑を晴らしてやったり，無事だったその恋人と若者が結婚すると財産権の執行者に指名したりする。「ユダヤ人が何かしてくれるとしたら」という当初の先入見をヘルムシュテットは再考せざるを得ない。

リパードもルッピウスも権力層に対する怒りは共通しているのに，それぞれの描くユダヤ人像はなぜこうも異なるのだろうか。ホームズの言うとおり，「育ち方と気質で多様性が生じる」のは当然としても，ルッピウスが中西部各地で実際にさまざまなユダヤ人と触れ合っていたのに反して，リパードにそのような経験がなかったことは，見落とせない要因だろう。

3・6　ホーソーン――『大理石の牧神』他

今世紀に入ってホーソーン研究がますます盛んになってきたのは，メルヴィルもつとに察知していた彼の「暗さの力」が，精神的基盤を失って懊悩し絶望する「現代的実存」に共鳴を見出したからだろう。精神内部の核心は悪かもしれぬという不安を，人間だれしもが抱いている。内面の複雑微妙な状況を，何とかゲシュタルト化しようとすれば，象徴と寓意に拠らざるをえない。自分自身だけでなく村のお偉方やそれに「フェイス」（信仰）という名を持つ愛妻までが悪魔の夜宴に馳せ参ずるという幻想を介して，内なる悪へのおののきを描

Hosei University Repository

き出した短編「若いグッドマン・ブラウン」は，その典型だろう。終始罪の意識と悪の報いを主題としていたホーソーンの目に，ユダヤ人はどう映っていたのだろうか。

彼の在世中，つまり1804年から1864年までの間に，ユダヤ系の人口は数千人から十数万人へと急激に増えている。それでも全人口の0.03%に過ぎず，彼が実生活でユダヤ人と接触したことはほとんどなかっただろう。彼の『アメリカン・ノートブックス』には，同時代のユダヤ人に関する言及が皆無なのである。(62) しかし「思想にしみ込んだ固定観念」となれば話は別である。19世紀半ばまでに「彷徨えるユダヤ人」は，「許されざる罪」即ち聖霊冒瀆の罪を最も敢然と犯した代表的存在として民間伝承の域から溢れ出し，その主人公アハシュエロスをさまざまな象徴に仕立て上げる傾向は，当時のゴシック趣味とも同調して文学的流行になっていた。(63)「許されざる罪」をはなから許しがたいと思い込んでいれば，「彷徨えるユダヤ人」を道徳的，宗教的反価値の最たるものとして排斥する他なく，一方彼の悔恨，懊悩，永遠の放浪に同情していれば，残酷な現実に呻吟する思索的，懐疑的人間，「世界苦」(Weltschmerz)の体現者としてむしろ畏敬し，時空を超えた経験の結実としてその知力と魔術に畏怖するだろう。

ホーソーンの短編「イーサン・ブランド」では，非ユダヤ人の主人公イーサンがそういうファウスト的な心境を洩らす――「(『許されえぬ罪』というのは）人間と同胞であるという気持ちや神に対する敬虔の念にうち勝って，自分自身の強大な要求のために一切のものを犠牲にしてはばからぬ，知力の罪のことだ！　その報いとして，永劫の苦悩を受けるにあたいするただ一つの罪のことだ！」(64) とすればイーサン自身が「彷徨えるユダヤ人」の一内面を象徴していることになろう。彼は娘を人体実験に供したラパチーニ博士同様，村の少女を冷酷な心理実験にかけてその魂を滅ぼしたこともある。そんな彼でも「彷徨えるユダヤ人」自身ではあり得ない。ファウストではあってもメフィストフェレスではないからだ。「彷徨えるユダヤ人」は不死であって，われとわが胸に短剣を突き刺しても，短剣の刃がこぼれてしまう。作中で「彷徨えるユダヤ人」と明記はしていないが，先述のとおり，ディオラマを担いだ本物の「彷徨える」ユダヤ人行商が登場する。彼はディオラマ講釈師として，大袈裟に言えば人類の過去について普遍的な証人を演じている。ディオラマに映った彼の手は「巨大で，褐色で，毛むくじゃら」だというのだ。ディオラマを覗き込ん

Hosei University Repository

だイーサンが，やがてはっと後じさりするや，その行商は「わしの見世物箱のなかに入っているそいつは，えらく重いもんだってことを思いしりましたぜ——この『許されえぬ罪』というやつはな！」とまるでイーサンの内心を見透かしたようなことを言う。これがきっかけになって，イーサンは石灰窯の頂から青い巨大な炎のなかへ身を投じたとさえ思われる。このディオラマ師の作中での役割はいま一つ判然としないが，イーサンの半悪魔性に応える共鳴器と解釈する余地は残されている。

肉体的に死んだイーサンを，本尊のアハシュエロスと比べることはできないが，ディオラマで次から次へ世界の歴史的，地理的驚異を引き出してみせるユダヤ人行商の方は，例によって最小限の表象しか与えられていないが，短編「好事家のコレクション」（“A Virtuoso's Collection”）のなかでユリシーズの愛犬アーガスや，アラディンのランプや，プロスペロの魔法の杖や，老水夫に矢で射殺されたアホウドリや，チャールズ1世の首を刎ねた斧といった神話，文学，歴史の遺物を手に迫真の体験談を語り続ける博物館のガイドと通じるところもあり，道徳的な死とひきかえに肉体的な不死を与えられ，その結果として超人的な知能と魔術を身につけることになった「彷徨えるユダヤ人」像が漠然とながら思い浮かぶ仕掛けになっている。「好事家」のガイドは，客に不老長寿の薬はどうかとすすめる。そんな薬をのんだら，「生命の影は与えられても，霊魂は死ぬことになります」と断ったら，ガイドは，「分かりませんな，生が，地上の生だけが良いものでしょう」と淡々たる口調で答える。(65) 要するに，ホーソーンの筆になる「彷徨えるユダヤ人」は，合理主義的，唯物論的で，人間的な心情を冷凍させ，霊魂を死滅させる悪の象徴である。

ホーソーンは，大学の同級生だったピアス大統領の推輓で，1853年駐リヴァプール領事に任命され，以後8年間にわたりヨーロッパ巡歴の機を得た。1858年から59年にかけてイタリアに滞在し，フィレンツェ，シェーナ，ローマなど各地の文物に親しみつつ『大理石の牧神』に着手した。この作品の随所で，彼がいかにイタリア美術を摂取したか，その成果が窺える。作中では取り上げられないが，ローマのバルベリーニ宮殿でデューラーの「学者らと議論するキリスト」に目を留め，キリストの左側の人物について，「モーゼの律法の下で生きたユダヤの老人で，これほど醜く，悪意に満ち，頑迷で，実利的で，狷介な者はいない」と述べている。(66) 同じく『イタリアン・ノートブックス』からユダヤ人と係わる箇所をもう一つ引いてみよう。リヴォルノのシナ

Hosei University Repository

ゴーグを訪れた際の印象――「外観はキリスト教の教会に似ているが，中は汚くて，その匂いは神聖さとは無縁である。」[67] また『大理石の牧神』のなかで，ローマの「最も汚くて醜い地域」ユダヤ人ゲットーにふれ，「何千というユダヤ人が狭い範囲内で群居し，腐敗したチーズにうようよたかっている蛆虫のように，窮屈で不潔で雑踏した生活を送っている」と述べている。[68]

同じ小説の女主人公ともいうべきミリアムは「噂によれば，（彼女の顔にどこか東洋的な特徴が色濃く出ていたからだろうが）ユダヤ人大銀行家の娘つまり遺産執行人で，その金権一門につながる親類の跡継ぎ（'the heir of another of that golden brotherhood'），つまり彼女の従兄弟の一人と結婚させられるのを避けるため父の家を離れた」となっている。[69] このように汚く醜く蛆虫のような下層から「金権一門」の上層にいたるまでユダヤ人関連の表現を並べてみれば，ヨーロッパへ渡って彼らと接する機会がふえたあとも，ホーソーンのユダヤ人観に変化は生じていないことを推察しうる。

『イングリッシュ・ノートブックス』に拠れば，1856年4月13日彼は時のロンドン市長デイヴィッド・サロモンズの公邸で催された正餐会に招待された。サロモンズはこの職に公選された最初のユダヤ人である。接客室に入って市長と握手を交わし，市長夫人に紹介される。「忌憚なく言えば，彼女はちびで醜いユダヤ人の老婆である」というのが彼の印象だ。[70] 食卓で彼の正面に坐ったのは，市長の弟（もしくは兄）とその妻であった。この夫妻の描写からホーソーンのユダヤ人観が如実に窺える。

彼の視線はたいてい目の前の市長の義妹に引きつけられていた。生まれてこの方，こんなに純潔で精妙な貌を見たことがなく，髪は夜のごとく死のごとく漆黒で，ユダヤ的とはいえ鼻の形も美しく，容姿のすべてがあまりにも端麗で，その描出は絵画よりも彫刻によるべきだ。ほっそりと若々しく，柔和で女性的でありながら冷厳な魅力を湛えている。ヤコブが7年間そしてさらに7年間求愛したラケル，女性的な優しさを具えながらも正義のためには男を殺せたユディト，ダビデを幻惑したバテシバ，禁断の果実に手をのばすほど意志薄弱とは思えないエバを彷彿させる。だが彼女に触れることは欲しなかった。「人種の違い，つまり彼女がユダヤ人という意識のせいか，あるいは別の理由でか，彼女を素晴らしい人だと認めながらも，一種の嫌悪感を抱いたのだ。」[71] 愛憎併存とはまさにこのことだろう。この市長の義妹こそは，上記ミリアムのモデルではないか，という予感がしてこよう。

Hosei University Repository

次いで右隣の彼女の夫，「すべてのユダヤ人を蒸留して得たエッセンス」に移って行く。「彼はイスカリオテのユダ，彷徨えるユダヤ人，同族中最悪で，同時に最も典型的なタイプだ……割礼を10回繰り返して受けたにちがいない。彼の横顔の輪郭ほど，醜く不愉快で目茶苦茶で滑稽なものを見たためしがない。ぞっとするほどユダヤ的で，残忍で，鋭敏なのだ。」話したり食べたりして口が開くと洞窟のようだ，と密生した彼の髭について詳述する。「にもかかわらず，彼の挙措は世慣れた紳士のそれだった。美しいユダヤ女性同様，この醜いユダヤ男性について伝えるのは骨が折れる。……わたしはこのシャイロック，このイスカリオテを十二分に楽しんだ。なぜなら，わたしはこの男を見て，彼の同類に対して常に抱いていた嫌悪感の正しさを証明できたからだ。」[72] 部分を以て全体を判断する誤謬（'pars pro toto'）がこれほど臆面もなく犯されている例は稀だろう。

もちろんこの一節は，公表を予期せずに記されたものだ。後日『イングリッシュ・ノートブックス』に手を入れて『われらがなつかしの故郷』（*Our Old Home*）を刊行したとき，ホーソーンは問題の部分を書き改めた。「ユダヤ」という語は一切省かれているが，その暗示はまだ残っている――「この女性の横に坐っていた男については，その鼻と額の鋭い輪郭を覚えているに過ぎない。」驚異的な髭の説明はそのまま残してあり，この男女が誰かは子供にだってすぐに分かるだろう，青髭とその何番目かの新妻だったのだ，と巧みに躱している。[73]

市長公邸での夜宴に関するホーソーンの記述を引用したのは，そこに描かれた市長の兄弟とその夫人が，『大理石の牧神』に登場するアントニオとミリアムにつながるからである。ミリアムはホーソーンが描いた唯一のユダヤ人女性で，「噂によればユダヤ人大銀行家の娘」となっていたが，彼女が芸術家仲間の一人に打ち明けたところでは，母親がユダヤの血を引いたイギリス人，父親は南イタリアの大貴族と縁続きで，どうもその名はある恐ろしい事件との関連で世界中に知られており，彼女も濡れ衣を着せられたという。この事件について具体的な説明はまったくないけれども，それが彼女につきまとう影となっている。過去の呪いと罪の報いにもだえるというホーソーン独特のニューイングランド的執念は，小説の舞台をイタリアに移しても相変わらずである。

ミリアムを熱愛しているモンテ・ベーニ伯ドナテロは，この世の汚れを知らぬ一種の自然児で，容貌がプラクシテレス作「牧神」像に似通っているところ

Hosei University Repository

から「牧神（フォーン）」と呼ばれている。ドナテロは，ある日ミリアムのアトリエを訪れ，ヤエルがシセラのこめかみに釘を打ち込んでいる絵や，ユディトがホロフェルネスの首を刎ねる絵を見て目を覆ってしまう。彼の苦痛を察してミリアムは明るい題材の絵を次々に見せ，最後にイーゼルの上に裏返しに架かっていた絵をめくり返した。それは彼女の自画像で，ホーソーンがその形容に費やした12行は，上述したロンドン市長公邸でのユダヤ美女礼賛を，ラケルやユディトの故事への言及も含めてほぼそのとおりに繰り返している。(74)

ミリアムがユダヤ教を奉じていないことは明らかであるが，ユダヤの血を受けていることで何やら謎めいた背景や性格を帯びさせられている。上述のとおり彼女はかつて父親の親族に当たる「侯爵」（マルケーゼ）と無理やり婚約させられていたが，年齢の大幅な開きに加えて相手の品性も下劣なので，婚約を全面的に破棄してしまう。ホーソーンはこのような決断が下せた理由を，「彼女に自由な考え方と意志力を授けた……一種の混血的要素」に帰しており，(75) キリスト教徒にユダヤ人の血が混じり合うと，文化の基調からずれた何か異質なことを生じかねない，といった一種の神秘化を狙っている。想像上の罪の意識が，やがて実際のそれに一変するのも時間の問題という気配になってくる。

ミリアムは，いまや破戒無慙なカプチン修道僧に落ちぶれたかつての婚約者とローマの地下墓地で出会って以来，ずっと彼につきまとわれている。古代ローマで裏切り者を突き落とした「タルペイア」の岩壁上にミリアムと「牧神」ドナテロが佇んでいると，「侯爵」がそっとミリアムに近づき，害意を感じた彼女の「目が命じる」ままに，ドナテロは両腕で「侯爵」を差し上げ断崖から放り投げる。精神的に無垢同然だった「牧神」はこの殺人行為で罪の意識に駆られ，その懊悩を通じて人間的に成長したというのが，この小説の主な筋立てといえる。ミリアムは，自分に何の咎もないある事件の影で罪を意識させられ，敵将を殺した聖書上のヒロインたちになぞらえて自画像を描いたり，友人ヒルダがグイド・レーニの原画を模写した「ベアトリーチェ・チェンチ」，暴虐な父を暗殺させたとして処刑されたあのベアトリーチェの像に痛ましいほどの共感を覚えていた。「侯爵」の殺害を暗黙裡に唆したことで，彼女は上記のヒロインたちと同じ罪を，やはり現実に負うことになる。

ドナテロに殺された「侯爵」には，「彷徨えるユダヤ人」の特徴が具わっている。ミリアム，彼女の親友ヒルダ，ヒルダを恋する彫刻家のケニョンそして

Hosei University Repository

ドナテロがローマのカタコンベのなかへ入り，ミリアムが途中ではぐれてしまう。声を限りの探索でやっと彼女が現れたとき，「侯爵」の姿も薄暗闇のなかにあった。大昔のサテュロスさながらにごわごわした野牛皮のマントや，毛がついたままの山羊皮のズボンを身にまとい，つば広の円錐形の帽子をかぶっているために粗野な顔貌もぼやけてみえ，それも黒く伸び放題の口髭と顎髯のなかに埋没していた。(76)『イングリッシュ・ノートブックス』で描かれたサロモン市長の兄弟の顔貌が「侯爵」のそれと重なり合う。市長の義妹とミリアムほどは重なり合わないが，その分は地下通路案内人の説明で補われている。彫刻家のケニョンが「何時からここを彷徨っているのだ」と「侯爵」に尋ねると，案内人が「千五百年間ですよ。さっきお話したでしょ，聖人の方々を売ろうとしたあの異教徒の亡霊ですよ」と小声で告げる。この異教徒の亡霊とは，キリスト教徒迫害時代に帝政側のスパイとしてカタコンベに潜入したメンミウスのことで，礼拝室を覗き一瞬信仰と愛に目覚めかけながら，その聖なる衝動に抵抗したため，救いの手だてを断つ封印として十字架が彼の心臓に刻みこまれた。その後は魔人として，不用心に彼を地上に導く客がいれば，恩を仇で返し，葬り去られた昔の害悪を社会にもたらしては，また古巣へと引きこもるのだった。さらにもう一つ，ミリアムの半ば幻想的な話によれば，「あの亡霊が，とうの昔に失われた古代ローマのフレスコ画の秘法をわたしに教えてくれると約束したわ。ただし壁画を完成させたら，彼といっしょに冥界へ戻っていかなければならないの」(77)——これもメフィストフェレス的魔術を思わせる「彷徨えるユダヤ人」の特性の一つに他ならない。

ホーソーンがこの作品の核心に据えた問題は，罪の倫理的な役割である。ドナテロが罪の意識を介して知性と道徳感に目覚める精神的変質（‘transformation’），即ち「大理石からの蘇生」から判断すると，「罪は，宇宙のなかの恐ろしい暗黒だと考えていたけど，実は悲しみと同じく人間教育の一要素で，それを経てはじめてわれわれはより高尚純潔な状態をめざせるのかな。アダムが墜落したのは，われわれがついに彼の楽園よりもずっと高邁なそれに到達するためだったのか」(78) というケニョンの問いかけは，作者ホーソーンを代弁したものだろう。たしかにこの問いかけは，罪のプラス面だけを強調しているかのような誤解を招きやすい。そこで，正統的信者たるヒルダにケニョンを真っ向から非難させる。ミリアムからドナテロの「変容」を聞かされたケニョンが，その「幸運な堕落」に感動しながらも，ヒルダの面詰でたちまちその感動

Hosei University Repository

に遺憾の意を表するという展開になる。しかし作品の大筋からいえば，ヒルダに「幸運な堕落」を厳しく否定させたのは，キリスト教体制の面目にホーソーンガ配慮した結果だろう。罪に対するおののき，悪の報いに偏執しながらも，ホーソーンは宇宙における道徳の支配を，いわば定言的命令として受け容れていたのではなかろうか。もし罪に教育的，精神高揚的な機能があるのなら，そのような教育的，精神高揚的な機能を一切麻痺させる反価値的存在を措定し，想像の限りを尽くして「許されざる罪」の根源たるその悪魔的存在を神秘化するのは，きわめて効果的である。ホーソーンは「彷徨えるユダヤ人」伝説の象徴的価値に着目し，シニカルな悪の権化としての側面のみを表象した。その表象が彼自身のユダヤ人観につながっていることは，認めざるを得ない事実だろう。

（付記）　この論文は，平成6年度文部省科学研究費補助金によるリサーチの一部をなすものです。

《注》

（1）Montagu Frank Modder, *The Jew in the Literature of England* (JPS, 1939)
Edgar Rosenberg, *From Shylock to Svengali* (Stanford Univ. Press, 1960)
Harold Fisch, *The Dual Image* (KTAV, 1971)

（2）Louis Harap, *The Image of the Jew in American Literature* (JPS, 1974)
Sol Liptzin, *The Jew in American Literature* (Bloch, 1966)
Leslie Fiedler, *Waiting for the End* (Penguin, 1967)

（3）河野　徹，「近代英文学にみるユダヤ人像」，（『法政大学教養部紀要第85号』，1993）pp.114−119.

（4）Fiedler, *op. cit.*, p.80.

（5）*cf. A Concordance to Herman Melville's Moby-Dick,* p.977. 引用箇所は幾野宏訳『白鯨』（集英社，1980）p.395. 下線部筆者。

（6）*cf.* Oscar Handlin, *Adventure in Freedom* (McGraw-Hill, 1954) pp. 178−9.

（7）*Commentary,* August 1978, pp.24−34.

（8）Fiedler, *op. cit.*, p.82.

（9）*Encyclopaedia Britannica Vol.15* (1966) 'Mayflower' の項に「誓約」全文が載っている。

（10）*Encyclopaedia Judaica Vol.12* (1972) pp.256−7. Monis, Judah の項。

（11）Max Dimont, *The Jews in America* (Simon & Schuster, 1978) p.50.

（12）*ibid.*, p.42.

Hosei University Repository

(13) *ibid.*, p.43.
(14) Frances Butwin, *The Jews of America: History and Sources* (Behrman, 1973) p.17.
(15) Howard M. Sachar, *A History of the Jews in America* (Knopf, 1992) p.13.
(16) Jerome Ruderman, *Jews in American History: A Teacher's Guide* (KTAV, 1974) p.31.
(17) *Encyclopaedia Judaica Vol.11*, pp.488–9. Lopez, Aaron の項。
(18) Ruderman, *op. cit.*, p.78.
(19) Dimont, *op. cit.*, pp.59–60.
(20) Ruderman, *op. cit.*, p.54.
(21) Butwin, *op. cit.*, p.25.
(22) As quoted in Ruderman, *op. cit.*, p.57.
(23) John Higham, *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America*, (Atheneum, 1975) p.122.
(24) Butwin, *op. cit.*, p.38.
(25) *ibid.*
(26) Ruderman, *op. cit.*, p.77.
(27) *ibid.*, p.96.
(28) Dimont, *op. cit.*, p.99.
(29) Ruderman, *op. cit.*, p.111.
(30) Morris U. Schappes, ed., *A Documentary History of the Jews in the United States 1654–1875* (Schocken, 1971) p.472.
(31) *ibid.*, p.473.
(32) Stanley Feldstein, *The Land That I Show You: Three Centuries of Jewish Life in America* (Anchor Press, 1978) pp.75–6.
(33) *Encyclopaedia Judaica Vol.15*, p.1650. United States of America の項。
(34) この時期のユダヤ人差別を扱った映画として，エリア・カザン監督，グレゴリー・ペック主演の『紳士協定』(Gentleman's Agreement, 1947) がある。
(35) Dimont, *op. cit.*, p.129.
(36) *cf.* Michael Selzer, ed., *"KIKE!"* (World, 1972) pp.55–58 ['We Do Not Like the Jews as a Class,' New York Herald, July 22, 1879]. このアンソロジーは，当時の風刺漫画十数葉を複製収録している。
(37) Handlin, *op. cit.*, p.180.
(38) Charles Follen Adams, *Leedle Yawcob Strauss and Other Poems* (1878) pp.50–52, as quoted in Harap, *op. cit.*, p.4. 下線部筆者。
(39) Rosenberg, *op. cit.*, p.15.
(40) *The New Standard Jewish Encyclopedia* (1992) によれば，セファルディー系ユダヤ人のニューポート定住を 1658 年とする従来の説は，現在では疑問視されている。
(41) As quoted in Liptzin, *op. cit.*, p.41.
(42) *The Complete Poetical Works of Longfellow* (Houghton Mifflin, 1922) pp.191–2.
(43) As quoted in Harap, *op. cit.*, p.90–91.

Hosei University Repository

(44) ロングフェロウは *Tales of a Wayside Inn* のなかで Spanish Jew に 4 篇の話を語らせる。そのうちユダヤ人関連のものは，"The Legend of Rabbi Ben Levi" と "Azrael" の 2 篇で，ともに Angel of Death を題材としている。Angel of Glory を題材とした "Sandalphon" という詩もある。
(45) "The Quaker Alumni," ll. 119–120, W. Garret Horder, ed., *The Poetical Works of Whittier* (Oxford Univ. Press, 1911) p.243.
(46) "Palestine," st.15, l.1; st.16, l.1; st.17, l.1. Horder, ed., *ibid.*, p.281.
(47) *Whittier's Works Vol.I*, (AMS, 1969) p.284.
(48) *ibid.*, p.387. この詩の冒頭に『タルムード』ベラホート篇 i.f.6.b. が引用されている。
(49) Liptzin, *op. cit.*, p.49.
(50) "The Crucifixion," *Whittier's Works Vol. II* (AMS, 1969) pp.195–6.
(51) Liptzin, *op. cit.*, p.50.
(52) *ibid.*
(53) As quoted in Harap, *op. cit.*, p.87.
(54) As quoted in Liptzin, *op. cit.*, p.52.
(55) As quoted in Harap, *op. cit.*, p.88.
(56) 引用箇所は坂下昇訳『レッドバーン』(国書刊行会，1982) pp.26–7.
(57) Higham, *op. cit.*, p.139.
(58) George Lippard, *The Quaker City* (Philadelphia, 1849). この節で扱う 2 編の原書は未見であり，以下の記述は大半をハラップとリプツィンの前掲書に負っている。
(59) As quoted in Harap, *op. cit.*, p.49.
(60) Frederic Cople Jaher, *A Scapegoat in the New Wilderness* (Harvard Univ. Press, 1994) pp.232–3; Harap, *op. cit.*, p.48.
(61) Otto Ruppius, *The Peddler, a Romance of American Life* (Cincinnati, 1887). これはドイツ語原書 (1853) の英訳である。
(62) Harap, *op. cit.*, p.107.
(63) George K. Anderson, *The Legend of the Wandering Jew* (Brown Univ. Press, 1965) p.212.
(64) 引用箇所は大橋健三郎訳「イーサン・ブランド」(集英社版世界文学全集『ポー・ホーソーン』，1980) pp.371–2.
(65) Nathniel Hawthorne, *Mosses from the Old Manse* (Ohio State Univ. Press, 1974) p.489.
(66) Hawthorne, *The French and Italian Notebooks* (OSU Press, 1980) p.92.
(67) *ibid.*, p.50.
(68) N. H. Pearson, ed., *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (Modern Library, 1937) p.813.
(69) *ibid.*, p.602. 下線部筆者。
(70) Randall Stewart, ed., *The English Notebooks* by Nathaniel Hawthorne (Russell, 1962) p.320.
(71) *ibid.*, p.321.
(72) *ibid.* 下線部筆者。
(73) Hawthorne, *Our Old Home* (OSU Press, 1970) pp.336–7.

Hosei University Repository

(74) Pearson, ed., *The Complete Novels etc.* (Modern Library) p.617.
(75) *ibid.*, p.837.
(76) *ibid.*, p.606.
(77) *ibid.*, p.609.
(78) *ibid.*, p.854.